

アリストテレス形而上學

の主題とその構成（完）

藤 井 義 夫

第二部 アリストテレス形而上學の構成

一 形而上學の成立史的構成

第一部の究明に於て我々の贏ちえた結論は、ひとがアリストテレス形而上學の主題を擇一的に神學或は存在學にもとめる限り、我々がさきに指摘した *Theologia-Ontologia-aporia* は決して開通されえない、といふことであつた。けれどもアリストテレスに於て形而上學的領域は所詮その二つの學の外に索めることはできないからして、我々は嘗てアポリアとして把握された二つの學を何らかの仕方では形而上學の主題として救ひ出すべきである。それ故に、形而上學の主題は存在學であるか神學であるか、といふ問ひは今や次の様に問ひ改められなくてはならぬ。形而上學がその主題として、神學と存在學とを矛盾なしに包攝することは如何にして可能であるか。

アリストテレスは形而上學の序論に於ける存在論的原理の發見史のある場所
 次の様に語つてゐる。「かく歩武を進めるとき、事象そのものが彼等に途を拓きそし
 て探究を續けることを餘儀なくしたのである。」⁽¹⁾ (ἡτοιμασθαι ὁ ὄντας, αὐτὸ τὸ πρὸς τὰ πάγια ἄδοκτο-
 ῖσιν αὐτοῖς καὶ συνυψιχθεῖν ἐπιτεῖν) このことはアリストテレス哲學の探究に對して基
 礎的な意味をもつてゐる。彼は自らの思索をつねに具象的な歴史的理解から、そ
 して抽象的な概念的思惟からではなく、出發せしめた。アリストテレスの思想を
 性格づけるものは、中世のスコラの解釋によつて曲解せしめられた様に、枯渴した概
 念の圖式論ではなくて、事象そのものの發展史に外ならなかつた。そしてそれ故に
 彼の思想を彼の歴史的地位の全體性から發展史的に理解することは最もアリスト
 テレス的であると云はねばならない。彼こそはこの「發展史的方法の巨匠」であつた
 からである。⁽²⁾ アリストテレス形而上學の主題を解明するに當つても亦我々は、ト
 マスに於ての様に體系的でも、亦ナトルプに於ての様に批判的でもなくて、まさしく
 この發展史的方法によらねばならぬ。

このときあたかもこの方法によつて我々の研究の本質的な部分を爲し遂げたも
 のはヴェルナー・イェーガーであらう。彼はアリストテレス研究の歴史にひとつの

時代を劃したと云はれるところのかの著作に於て、他(3)の多くの學者たちによつてその重要性を不當に看過されたところのアリストテレスの初期對話篇——*ἐκ τῶν ἐπιπέδων λόγος*——について保存された斷章と後期(4)の代表的著作、——*ἀποδοτικὸς λόγος*——就中「形而上學」との精緻な比較研究、並びにそれら諸著に用ひられた種々の文體の言語學的
 研究を基礎として、アリストテレスの思想發展の歴史の中に二つの時代を劃しえたのである。即ちアリストテレスが未だ全然プラトンの影響の下にあつて、師の單なる模倣と學的遺産の忠實な管理とに終始した修業時代、及びそこから巢立ちして彼の獨自の哲學體系を發見し建設した體系時代。たとへば形而上學について云ふならば、プラトンの思想圈を一步も出てゐないところのかの初期對話篇と同じ問題設定が、アリストテレスの後期の圓熟した思想と並んで形而上學の中に見出し得ることからして、イエーガーは形而上學をひとつの原理によつて貫かれた統一的著作と見る抜き難き古き傳統を破碎して、形而上學の中にもこの二つの時代が反映してゐることを明かにしようとした。即ちプラトン最後の時期に連るところの「存在の原因及び原理の學」としての形而上學は最も初期的なる徵表であり、實在そのもの問題へ關心がむけられたのは後期の形成に於てである、といふことがイエーガーの形而

上學解釋を貫く基調であつた。⁽⁵⁾ このことが完全に我々のものであるとき、かのアポリアは解決の曙光を見るに至る様に思はれる。なせならば永遠なる存在の學、神的なるものの學はアリストテレスの初期的思想であり、存在する限りの存在の學は彼の成熟した後期的思想であると解し得るならば、かの閉された道は (*ἀντοπεύματα*) 却つて我々に道を拓く (*προπεύματα*) であらうからである。それ故に我々は形而上學の主題に關するアポリアの解明に對して、イエーガーの研究が如何なる寄與をなし得るかを知らるために、形而上學の概觀とそれに對する彼の成立史的研究を瞥見してみよう。しかしそれは主題の問題の究明に有意味である限りに於て、しかも極めて自由な形式の下になされねばならない。なせならば我々の課題に對して何らの寄與をも有たぬところの單なる形而上學の原典成立史及びイエーガーの研究の忠實なる再現は、尠くとも我々の現下の目的に對して多くの重要を有ち得ないからである。

我々は既に本質的にポニーニツツの形而上學研究が成し遂げたところの「成立史的批判によつて純化された形而上學のトルソー」から出發しよう。この目的のために、まづ形而上學の編纂者によつて誤つて *cursus metaphysicus* の中に移し入れられ、その

ことが既に論議の餘地なきものとして一般に承認されてゐるところの諸卷 α 、 Δ 、 K 、 Λ を現在の場所から遠ざけて置かねばならない。その理由はかうである。卷 Λ の補論として附せられてゐるところの卷 α は、バシクレスの作としてポーニツツによつて眞偽が疑はれたけれども、明かにアリストテレスのものであり唯バシクレスの *ἐπιτομή* から形而上學に移された自然學への序論を表はしてゐる、と考へねばならない。形而上學及び自然學の基礎概念の種々なる意味が論せられ、*τῆς ἐπιτομῆς ἀπορίας* として引用されてゐるところの卷 Δ は、既にポーニツツによつて克明に論證された様に、種々の内的外的證跡、就中ディオゲネスのアリストテレス著作目録に獨立した書として舉げられてゐることからして *cursus metaphysicus* の外に立つてゐることが確證される。⁽⁶⁾ 更に卷 B 、 F 、 E と——簡約された形に於て——は、あるが——殆んど文字通り一致するところの卷 K (二—八) はその研究の對象が超越的存在であるところからして、ナトルプによつて贋作の疑ひが起されたけれども、イエーガーが周匝に論明した様に、この卷は卷 B 、 F 、 E と並んで獨立した初期の發展段階からの筆記であり、卷 K (九—一二) は自然學からの抜萃に過ぎない。⁽⁷⁾ 最後に、全形而上學の概觀と神學とを含むところの卷 Λ がもつ著しい特長は、それが先行諸卷について深く沈黙

を守り、形而上學の引用が少しも含まれてゐないことである。亦そこに於て感性的實有は自然學に屬し、非感性的實有はひとつの「特殊なる學」に屬しなければならぬと云はれ、第一哲學「或ひは神學」なる言葉が未だ存在しなかつたことが示されてゐる。それ故に我々はポニーニツツと共に卷Aが基礎哲學の構成への獨立した講義であること、そして他に適當な神學篇が存在しなかつたため形而上學の手稿の輯録者によつてこの場所に置かれたものと想定しなければならぬ。⁽⁸⁾ これらについては後に關説される機會を我々はもつであらう。これらの諸卷が除かれた後に、ポニーニツツ・イエーガーによつて見出された形而上學のトルソーの成立史的研究からして我々はこの書の意圖を知ることができる。

「人間は凡て生れながらにして知ることを希ふ」(*πάντες ἀβροῦτοι τοῦ εἰδέναι ὀρέονται* *phōnei*) といふ有名な言葉によつて首められてゐるか、の形而上學の開卷に於て、我々の智慧が一般に感覺から出發し、記憶、經驗など高次の段階を経て、究竟的なるもの知識に至るところの人間認識の發展過程が述べられてゐることは周知のことであらう。「智慧はなによりも事物のある原理及び原因の學である。」人が智者と云はれるとき、彼は能ふかぎり凡てのもの、認識し難きものを知り、凡ゆる知識についてより

正しくあり、よりよくその原理を教へ得るものでなければならぬ。又學の中それ自らのために欲せられるものは結果のために欲せられるものよりも、より支配的なるものはより從屬的なるものよりも、より多く智慧と呼べるゝに相應しい。それ故に智慧は最も一般的なる、最も識別し難き學である。しかもそれ自らのための知識は又最もよく知られる知識に屬してゐなければならぬ、なせなら他のものはそれによつて、そしてそれから知られるからである。この意味に於て最もよく知られるものは第一原理及び原因であり、我々の索めるのはこれらの學でなければならぬ。この學こそ最も神的なるものであり、その限り最も尊敬さるべき學である。なせなら神こそ凡ての事物の原因の中の原理であり、又かゝる學を神のみが或ひは他のなものにもまして神が有ち得るのだからである。かくて智慧が第一原理の學、神的なるものの學として規定された後、それに續く諸章に於て、自然學の對象とされたところの四つの原因——*causa materialis, formalis, agens, finalis*——の發見史及びプラトンのイデア論とその批判が叙述せられ、そして茲にアリストテレス哲學の發展が準備されてゐるのである。⁽⁹⁾この卷Aに與へられた「智慧」(*sophia*)の規定は極めて異色あるものである。それはイエーガーによつて拒否し難く示された様に、アリストテレスの

初期對話篇「プロトレプタイコス」に表はされてゐる思想に、従つてプラトン後期の思想に基礎を置き、それと直接の關聯を示してゐるのみならずこの卷全體の内容が濃くプラトンの色彩にいろどられてゐるのである。そして茲でのプラトン批評は特殊なる複數一人稱——*τίθειεν, λέγομεν, παύειν*——の使用によつて、アリストテレスがなほプラトン學派の一人として師の説を奉じ、イデア批評によつて自己清算を試みようとしてゐたことを示してゐる。⁽¹⁰⁾

卷Bに於ては形而上學的思索をなすものが「索められてゐる學」(ἡ ἐπιτίθηται ἐπι-στήμη) に對ふとき、つねに出遭ふべきアポリアが掲げられてゐる。

- 一、凡ての原理が一つの共通なる學の對象となり得るか。
- 二、索められてゐる學は證明の原理、所謂形式的原理をも取扱ふか。
- 三、索められたる學は凡ての獨立した實有を取扱ふか。
- 四、それはこれらの實有のみを取扱ふか、若しくはその屬性をも取扱ふか。
- 五、感性的實有の外に尙非感性的實有、例へばイデア或は數學的對象の如きものが存在するか。

六、實有の原理とは、その類であるか、或ひはその要素であるか。

七、もし類であるならば最高類であるか、それとも最低類であるか。

八、存在の原理と要素とは認識と如何なる關係に立つてゐるか。

九、原理は數によつて一であるか種によつて一であるか。

十、可滅的なる事物の原理は不滅的なる事物のそれと同一であるか。

十一、「存在と一」とは凡ゆる事物の原理と考ふべきであるか。

十二、數學的思惟の對象は實有性を有つてゐるか。

十三、イデアを原理として定立するのは如何なる根據によつてゐるか。

十四、原理は可能的であるか、現實的であるか。

十五、原理は個別的であるか、一般的であるか。

これらのアポリアの中最初の四つは原理の學としての形而上學の構成に、他のものは形而上學の對象に關してゐる。そしてその本質的なものを我々は、如何なる非感性的實有が存在するか、それらの原理は一つの永遠なる超越的實有であるか、さうであるならばそれは如何なる意味に於てゐるか、の問ひに索めることができるであらう。茲に擧げられたアポリアは——最後の二つを除外するならば——感性的實有を形而上學の對象として取扱はないで、凡て超感性的なものの上に横はつてゐる。

そしてこれらの問ひはプラトンのイデアの創説以來唯一の哲學的問題であり、プラトンとスベウシッポスとの間に行はれた論争の中心であつた。それは全體的にプラトンから生起したのみならずそれ自身プラトンのと云はるべき哲學の典型を示してゐる。それ故にアリストテレスは形而上學の諸問題を形成するに當つて、プラトンの一學徒としてプラトンの問題を問題とし、それが彼の初期形而上學時代の課題であつたと云はねばならない。イデアについて述べられた二つの場所で卷Aに於ての様に複數一人稱が用ひられてゐることは以上の論據に外的な證據を提供するであらう。⁽¹¹⁾

卷Γ及び卷E第一章に於て、アポリア篇の四つの序論的アポリア——形而上學の概念、對象及び範圍の限界づけ——に對する明快な解決が見出される。そして相關聯した第一及び第四のアポリア、即ち凡ての原理が一つの學の對象となり得るか、それは超越的實有のみを取扱ふか、その屬性をも含むかに對しては、卷Γ、第一——二章に於て次の様に答へられてゐる。存在する限りの存在及びその存在にそれ自らによつて屬してゐるところのものを觀想するある學が存在する。それは特殊なる學と決して同一でない。なせなら他の如何なる學も一般的に存在としての存在につい

て考察しないで、その一部分を引離してその屬性を觀想するからである。それ故に我々はなによりも存在する限りの存在の第一原因を把握しなければならぬ。存在は種々の意味に語られるけれども、その凡てはひとつの原理に關してゐる。といふのはあるものは實有であり、あるものは實有の様態であるところからして、また他のものは實有への道、その滅失、缺如、性質、制作、生成或ひは否定であるところからして、事物が存在すると云はれるからである。あたかもそれ故に我々は非存在をまた非存在と云ひ得るのである。ところで學は如何なる場合にもすぐれて第一のものを他のものがそれに依存し、それによつて名づけられる所以のものをその對象としなければならぬ。そしてこれが實有であるならば、實有について哲學者は原理と原因とを有たねばならない。かくて存在する限りの存在及びその屬性を觀想することがひとつの學に屬してゐることは明かである。更にこの卷の主要部分をなしてゐるところの第三章以下では第二のアポリア、即ち數學に於て公理と呼ばれるものを取扱ふことと實有を取扱ふこととは同じひとつの學に屬してゐるかに答へてゐる。それがひとつの學に、しかも哲學者の學に屬してゐることは明かである。なせならそれは凡ての實有に屬し、單にある特殊なる類に屬するものではない、従つてそれは

存在する限りの存在に妥當するからである。それ故「推論式の原理について」(τὴν τῶν συλλογιστικῶν ἀρχῶν) 探究することも哲學者の任務でなければならぬ。凡てのものの中最も確實なそして最も周知の原理は同じものが同じ點に於て同時に屬しまた屬しないことは不可能であるといふ所謂矛盾律であらう。なせなら如何なる人も同じものが同時に存在しまた存在しないといふことは不可能であるから。かくてこゝで矛盾律が精細に規定され、それを否定しようとする人たちが陥るところの笑ふべき自家撞着が指摘され、また公理のその又證明を索むる人々が反駁され、更に排中律の議論が之に續いてゐるのである。この場所に於ける公理の存在論的解明は「オルガノン」殊にその分析論との關係に於て、アリストテレスの論理學の性格を決定すべき重要な契機を含んでゐる。しかし我々はこれらの興味ある問題を措いて、我々の叙述をたゞ形而上學の成立史的構成に限局せねばならぬ。卷Γに次いで卷E第一章に至つて第一哲學の固有なる領域が不動なる非質料的實有となり、かの學が神的なるものの學となつたことは既に我々が論定したところによつて明かであらう。⁽¹³⁾

かくて形而上學の一般的概念及びその範圍が究明された後之に續く諸卷に於て

我々の期待するものは、卷Bに展開された第五以下のアポリア、即ち超感性的なるものの研究でなければならぬ。しかるにこれらの問ひに答へる代りに卷E第二章に於ては周く知られたかの存在の四つの形態、偶然的存在、眞としての存在と偽としての非存在、範疇の形態による存在、及び可能的存在と現實的存在が新に提起され⁽¹⁴⁾、そして第二—三章に於て、偶然的存在についてはその學的觀想が決してあり得ない所以が詳細に規定されてゐるのである。それはかうである。存在する事物の中にあるものはつねにかくの如き仕方でも必然的に——強制によつてははなく、他様にあり得ないとの意味で——存在し、他のものは必然的にでも恒にでもなく、多くの場合存在する。これが偶然的なる存在の原因である。なせなら恒にも多くの場合にも存在しないもの、それを我々は偶然的にあると云ふからである。たとへば人が色白くあるのは偶然的であるといふのはつねに亦多くの場合人はさうあるのではないから、しかし彼が動物であることは偶然によつてははない。それ故に恒に亦は多くの場合あるよりも他の仕方であり得るところの質料が偶然的なる存在の原因である。そして偶然的なるものの學があり得ないことは明かである。なせなら凡ての學はつねに或は多くの場合あるものについてあるからである。⁽¹⁵⁾ 第四章に於

ては存在の第二の形態、眞としての存在と偽としての非存在が寧ろ論理學に屬するものとして形而上學から排斥されてゐる。結合と分離とは事物の中にではなくむしろ思惟の中にある、この様な存在は固有な存在——範疇の形態に於ける存在——とは異つてゐるから我々は眞なる存在をも偶然的存在と同様、この學から追放せねばならない。なせなら一方の原因は無限であり、他方のそれは思惟のある性態であつて、存在の客觀的な性質を明かにしないからである。我々はむしろ存在する限りに於て存在の原因と原理とを探索しなければならぬ。

卷Eに續いて、形而上學中の壓卷といはれるところの卷Z、H、Θにあつては、卷E第二章以下の場合に於ての様に、かのアポリア篇へ何らの關聯を有つことなしに、存在の第三、第四の形態が極めて周匝に論究されてゐる。即ち卷Zに於ては實有の四つの意味——*τὸ τὶ ἦν εἶναι, τὸ καθόλου, τὸ νέον, ἐπισκεύου*——の究明及び定義論とプラトンのイデア批評とが順次に叙せられ、卷Hに於ては質料の意味の解明が續き、かくて形而上學者にとつて決定的な超越性 (*ὑπερβασις*) の問題が「質料」と「基體」の積極的な意味の揚擧によつて完全に解決されてゐる。そして卷Θでは形相と質料との區別及び協同によつて、かつてギリシャ哲學を困憊せしめた生成變化の問題を美事に克

服したところのかの可能と現實 (*Sūvatus, eidiōyeta*) の概念が考察の對象となつてゐるのである。然し我々は實有篇に於けるこれらの存在の現象形態が擔ふべき意味を茲に縷説することはできない。なせならばアリストテレス學に對してそれらがつ重要性の故に、我々はそれに就て一つの獨立した論作を必要とするであらうからである。そして我々はこゝでも亦我々の論述をその成立史に關して興味ある部分に限らねばならない。上にみて來た様に、卷 E (二) 以下に於ては存在の四つの形態が順次に闡明されてゐる。このことからしてひとは——形而上學の多くの皮相的な讀者が常に假定するであらう様に——卷 E (二—四) と卷 Z (一) とが極めて圓滑な思想行程によつて流通してゐると想定するかも知れない。しかし我々はこの想定を覆すべき確實なる若干の證據をもつてゐるのである。卷 Z の端緒は、卷 E (二) に於ける存在形態の四つの區別にも拘らず、それと同じ四つの存在の意味の枚擧を以てしかも卷 Δ (七) の引用によつて開かれてゐる。⁽¹⁶⁾ 又卷 Θ に於ては存在の可能態、現實態が論せられた後第十章に於て、卷 E (四) の叙述にも拘らず、再び眞としての存在が論明されてゐるのである。⁽¹⁷⁾ これに續く卷 I に於ては卷 Z (一) は、恰かも卷 Δ が、*περὶ τοῦ πρᾶξῶς*、として示された様に *περὶ τῆς αἰτίας λόγου* として引用せられ、又卷 Z の緒論が

屢「端緒」(ἐπιπέφυξι)として述べられてゐる。これらの論據からして卷Z—Θは元來獨立した著作として成立し、後に至つて *cursus metaphysicus* の中に挿入されたものと言はねばならない。⁽¹⁸⁾ イエーガーは卷E(二—四)が、超感性的存在に制約せられてゐるところの卷A—E(一)と内的に思想の連絡なく、又卷Z—Θと外的に何らの關聯を有たないことからして、この部分をアリストテレスが初期形而上學と後期のそれとを結合するため、形而上學の最後の修正に於て加へられ、前者から後者への思想過程を流通せしむるために、この「結合篇」に於て後に來るものを素描せしめたものであると解してゐる。⁽¹⁹⁾

卷Iの對象は「一」である。それは「一」が實有であるか、それとも存在と共にあるところの述語に過ぎないか、といふ卷Bの第十一の آپORIAを取扱つてゐる。そして一方ではプラトン、ピタゴラス學派並びに彼等と同様の立場をとる人々の概念の實體化を反駁し、他方哲學的諸問題の解決に資するための概念的要素として「一」の種々なる意味及び同一性、類似性、差異性、不同性、反對性等の諸概念が解明されてゐるのである。そしてこのメトドスに至つて論の緻密さと周匝さとはその頂點に達し、この書が卷Z—Θと等しく獨立の目的によつて著はされたことを示してゐる。それは嚮に

述べた様にこの書に於て卷Z、Hが「實有篇」として誌されてゐるのみならず、等しく「一」の問題を取扱つた卷Nの最初の部分とこの場所との相互の關聯が闡明されてゐないことによつて明かである。それ故にこの書も形而上學的發展の最後の時期に編入されたものと解してよいであらう。⁽²¹⁾

我々は最後に超感性的なるものを對象としてゐるところの卷M、Nを瞥見して置かう。卷Mは凡そ三つの部分に分つことができ。まづ數學的思惟形象が、それに結合された形而上學的問題に關知することなしに、純粹にそのものとして觀察され、第二の部分に於てイデアがプラトンの後期の思想、即ち數としてのイデアの説明に關知することなしにむしろ初期的な歴史的な形式に於て研究され、最後の部分に於てスペウシツポス及びクセノクラテスの數理哲學に對する批判的論争が續いてゐる。この最後の場所に叙述されたイデア批評が、卷A、Bのそれに比して、有つ著しい特長は、かしこではイデア論が彼の哲學的關心の中心をなしてゐるに反して、こゝではかの古典的思辨の形式は既に陳腐なものとして取扱はれ、唯論構の完璧を期するために論せられたに過ぎない。亦最初の二つの部分も、そこから歴史的に發展したスペウシツポス及びクセノクラテスのイデア論の前階として歴史的な興味をもつ

に過ぎないのである。又こゝでは卷 A、B に於けるイデア批評の特色をなしてゐたところの特殊なる複數一人稱が凡て除かれてゐる。これらのことからして卷 M の成立期が卷 A、B よりも遙かに後であつたことを推すことができる。⁽²²⁾既に古代の註釋家にも知られてゐた様に、この卷は第九章、一〇八六 a 二〇で終つてゐる。そしてそこから新しい論説が始まつてゐるのである。このことについて我々は、既にシユベーグラ―によつて指示され、イエーガーによつて委曲を盡して論せられた種々の論據を擧げることゝ止めよう。⁽²³⁾たゞ我々の目的にとつて重要なことは、この新に分離した箇所を卷 M の序論に比較するとき、前者が後者に對する舊き見解であつたことを知り得る點である。そして卷 A、B への屢なる引證及び特殊なる用語法——*ἰσοπονομήτεια νέγεια*——はこの部分が卷 A、B と同時代に成立したことを示してゐる。⁽²⁴⁾同様のことは亦卷 N についても妥當するであらう。我々は卷 M (九) の舊き序論を直ちに卷 N に結合することはできないけれども、その内容上全體としてこれの意圖を展開したものと見ることができる。なせならば茲でもスベウシツポスに對する周到な駁論が含まれ、また存在の要素及び原理 (*στοιχεῖα καὶ ἰσχύαι*) としてのイデア及び數の意味が強調され、かくて第一哲學を存在の原理並びに原因の學として定義した初

期形而上學の思想に完全に合致するからである。それ故にこの部分は後に卷M(一—九)によつて代置されるに至つたところの舊き形而上學に屬することが確説されるであらう。⁽²³⁾

以上のアリストテレス形而上學の成立史的研究からして、形而上學が彼の晩年の著作であるといふ一般の見解は全く支持され得ないことが明かにされた。我々は彼の形而上學的諸問題がプラトンの晩年及びその死の直後に於て彼の關心の中心をなしてゐたものに屬することを最も明かに認識しなければならぬ。そしてアリストテレスは彼の學的活動の最後の時期に於て、彼の形而上學的全著作を修正しかの古き思想を新しきそれに流通せしめるために、ある部分を削除し、又新にある部分を添加したのである。従つて我々は現況に於ける形而上學の中に相反する傾向をもつた二つの異なる形而上學を讀みとることができる。その一は原始形而上學と呼ぶべきものである(卷A, B, M九—一〇, M)。こゝでは形而上學は尙存在の第一原理の學、神的なる存在の學であつて存在一般の學ではない、この時代に於ても勿論存在そのものの概念が缺如してゐるのではないけれども、それは主として自然學の地盤の上に生ひ立つたものであつた。そして後に實有の問題が彼の關心の中心を占

め、存在する限りの存在のホリゾンに立つに及んで後期形而上學を形式する部分が成立した(卷 Z—Θ, M)。そして最後の形而上學の推敲改訂に際して、アリストテレスは原始形而上學と後期形而上學とを結合するために、卷 B に於ける形而上學的アポリアに新に感性的實有に關する原理即ち可能性と現實性、個別性と一般性のアポリアを加へ、更に全篇の思想的流通性を附加するために卷 E (二—四) I を結合篇として補入し、かくて形而上學の集感が完成したのである。⁽²⁶⁾

(一) Metaph. A3, 984a 18—19, Phys. A5, 188b 26—32. etc. K. Eucken; Die Methode der aristotelischen Forschung, 1872, S. 11. 參照。

(二) H. Meyer; Der Entwicklungsgedanke bei Aristoteles, 1909, S. 146.

(三) Werner Jaeger; Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung, 1923, Studien zur Entstehungsgeschichte der Metaphysik des Aristoteles, 1912.

(四) J. Bernays; Die Dialoge des Aristoteles, 1863. A. Stehr; Aristotelica, II. Über den Unterschied exoterischer und esoterischer Schriften des Aristoteles, 1832. 參照。

(五) Jaeger; Arist. S. II, 198 etc.

(六) Jaeger; Entstehungsgesch. Teil I, Kap. 5, 1. 2.

(七) Entstehungsgesch. Teil I, Kap. 3.

(八) Entstehungsgesch. S. 122—128.

- (九) 我々は序論に於てアリストテレスのイデア批判を概説した。しかしこの問題については別に論及するべき機会を我々はもつてあらう。
- (一〇) 原始形而上學とプロトレプティクスの關係については Arist. S. 68f. 参照。「我々プラトン學徒」の意味に於ける主格の用法は、古く既にこの書への駁論を捲き起し贗作の疑ひを生じた。しかしそれが何故に用ひられたかは *ἐπιπέδου ποιητής* の研究によつて充分窺ひ知る事ができる。Entstehungsgesch. S. 32ff. Arist. S. 172 Anm. 2 参照。
- (一一) Metaph. B2, 997b3, 6, 1002b 12. Entstehungsgesch. S. 99f. Arist. S. 108f. 201f. 尙卷Iを通じつ形而上學 *ἐπιπέδου ποιητής* と呼ばれ *ἐπιπέδου ποιητής* なる言葉が見出されることは、彼が未だ摸索時代にあつたであらうことを示してゐる。
- (一二) この問題については A. Trendelenburg; Elementa logicae Aristotelicae 1845. Logische Untersuchungen² 1870. H. Maier; Syllogistik des Aristoteles, 1897f. 等参照。
- (一三) 第一部(本誌) 第二二三號(六三頁以下) 参照。
- (一四) Metaph. E 2, 1026a 33—b2. 尙 47, 1017a7—b9, Z 1, 1028a 10, 10, 1051a 34—b2. 11, 1045b33—35 参照。
- (一五) 我々はプリントメンに於ける *συμβεβηκός ἢ ἐπιπέδου* = accidens の外に *συμβεβηκός ἢ ἐπιπέδου* = proprium の存在を示すを述べた。Metaph. Z6, 1031b 22—28, A33, 1025a 30—34. Anal. post. 75a 39—41, 76b11—15. Bontz; Ind. Arist. 714a 20—b43 参照。
- (一六) Metaph. Z 1, 1028a 1—2.
- (一七) この章の現在の位置については種々の疑ひがある。しかし私は主としてハーニッツの所説に従ひ現在の位置を認容する立場をとらねばならぬと信じてゐる。Bontz; Comm. p. 409. 尙 Entstehungsgesch. S. 49—53, 130, Arist. S. 212. Schwertler; op. cit. IV S. 186. Bullinger; op. cit. S. 182 等参照。
- (一八) Arist. S. 207f. に引用された箇所参照。この場所に於けるイデア批評に複数一人稱が用ひられてゐないことは「實有篇」

が卷 A、B よりも後に成立したことを示してゐる。Arist. S. 203f. Anm. I 参照。

(一九) Arist. S. 211f.

(二〇) Metaph. I 2, 1033b 17.

(二一) Entstehungsgesch. S. 171f. Arist. 208f. 参照。

(二二) Entstehungsgesch. S. 102 ff. Arist. S. 175ff.

(二三) Entstehungsgesch. S. 41ff. Arist. S. 185ff. Schwegler: op. cit. IV S. 334.

(二四) Arist. S. 192ff.

(二五) Metaph. M 9, 1089a 20—N に於ては感性的實有がこの學の對象とならないに反して M 1—9 に於てはその周匝な分析

及び内在的形相の先行することが前提されてゐる。Arist. S. 213ff.

(二六)

イエーガーのアリストテレス形而上學の成立史に關する見解は、彼の「成立史研究」と「アリストテレス」とでは、著しい徑庭がある。たとへば前書に於ては形而上學の成立期を三期に分ち略々次の様に述べてゐる。即ち卷 A—E はアリストテレス自らに歸せらるべき第一期の集成に屬し、之に卷 M、N 及び卷 I が續き、アリストテレスの晩年或は彼の直接の弟子たちによつて成形されたと看做さるべき第二期の集成に於ては以上の諸卷に卷 Z—Θ が結合され、之して更に新しい時代に屬する第三期の集成に於ては卷 α、Δ、K の追加が行はれたのである。卷 Δ の集成の時期については之を直に決することはできない、しかし恐らく第三の時期に屬すべきものであらうと。(Entstehungsgesch. S. 173f.)しかるに後書に於ては前書に比して形而上學成立期の統一的發展史的解釋への努力がなされてゐる。イエーガーの見解のこの轉向は如何なる根據から來てゐるのであるか。それは、既に彼自身も承認してゐる様に、「成立史研究」に於てはあまりに原典の古き言語學的問題設定、即ち原典の傳統的構成並びに書目の分類の是正に關する問題に捉はれ過ぎ、形而上學的思想の有機的なる理解を缺如してゐたに反して、「アリストテレス」に於てはこの缺陷を補ひ、アリストテレスの思想とこの哲學者の人格性との認識に意を用ひたこと、に歸せしめなければならぬ。(Arist. S. 172f.) イェーガーの形而上アリストテレス形而上學の主題とその構成

學解釋に於けるこの歩みは、彼の見解の理解に對して極めて重要である。我々は形而上學の成立史的構成についての彼の所説を敍するに當つても、それ故に、彼の後の著作を主たる手懸りとし、前の著作の引證は後の見解を確證するに足る場合にのみ之を援用した。

二 形而上學の構成と主題の發展史的究明

我々はイェーガーの研究を手引として、アリストテレス形而上學の成立史的構成を明示し、それによつて形而上學の主題に關するアポリアを拓くための「第三の途」を準備した。この成立史的構成から必然的に結果するところの主題の解明は、イェーガーの言葉を藉りるならばかうである。「形而上學の概念の兩つの分岐存在としての存在の一般學と神的存在の特殊學が同一の精神的創造作用から發出したものでないことには疑ひがない。こゝには根本的に異つた思想過程が入り組んでゐる。そして神學的、プラトンの思想過程がより原始的なものであり、より古い時代のものであることをひとは直ちに看取するであらう。それはたゞに歴史省的省察の上からのみでなく、それが著しく未發展のであり、そしてより圖式的であるところからしてさうなのである。それは感性的なるものの領域と超感性的なるもののそれとを峻

別しようとするプラトン學派の傾向に源を發してゐる。しかるに之と逆に存在としての存在 (ὄντις) なる定義は凡ての存在をひとつの大なる統一的な階層建築にまで包括してゐるのである。それは従つて——アリストテレスの思索の最後のそしてより獨自なる發展階段の意味で——兩者の中よりアリストテレス的なるものである。イデア批判を以て首められた形而上學の中にプラトンの思想を發見し得ることは、アリストテレスを頑迷なる反プラトン主義の巨魁とのみ信じる人々をして驚倒せしむるに足るであらう。にも拘らず我々はアリストテレスのこの獨自的なる偉業を「彼が如何にプラトンを批判したか」によつてであるよりもむしろ「彼が自らを如何にプラトン化したか」によつて價值づけなくてはならぬ。まことにアリストテレスに於けるこの兩つの思想の發見、形而上學に於ける超越論的、プラトンの思想と存在論的、アリストテレス的思想の峻別の中にこそ、イエーガーが我々に齎した劃期的な寄與が存在するのである。このことを顧慮することなしには、我々は決してアリストテレス形而上學の正鵠なる理解を期待することはできない。このときひとは、これによつて形而上學に於けるかの神學と存在學とのアポリアは完全に解消する、なせなら神學は原始形而上學時代の、しかし存在學は後期形而上學時代

の所産に外ならないからである、と論決し得ると信ずるであらうか。しかしそれは少しく早計である。慥かに我々はイエーガーの研究に導かれて、解決への途に基礎的な歩武を進めることはできる。たとへばさきに「實有篇」と「神學篇」との間に見出されたアポリアはこゝでは既にアポリアではないのである。しかし我々が「主題の問題」をそこから出發せしめたところの卷Ⅴ(一)の中に、形而上學の初期的發展階段に屬するといはれたところのこの書の中に、我々が逢着したアポリアは如何に解かるべきであるか。イエーガーの成立史研究に従へばそのことは決して可能でない筈である。それ故に我々は形而上學の主題の問題を中心として、彼の解釋を本質的に承認しながら、しかもその妥當の限界を明定しなければならぬ。

プラトンの思想の發展に於ても、ソクラテスの時代と獨自なるプラトンの時代とが存在した様に、アリストテレスの思想の中にもプラトンの時代とアリストテレス的なるものとが區別し得られることは極めて自然である。そしてかの形而上學が久しきに亙る彼の講筵から由來したものであることを想へば、形而上學そのものの中にも「修業時代」と「體系時代」とを看取し得ることは全く會通し易き理であり、多くの卓れた哲學史家によつてさへこのことが闕却されたところ却つて我々の理

解を超ゆることであると云はねばならぬ。しかし乍ら形而上學が成立史の見解からして種々の異なる時代に成立したことは、アリストテレスの思想そのものがそれぞれ異つた時代に發生したことを意味しない。思想そのものの發展の歴史は著作の成立の歴史と必ずしも一致するものではないのである。たとへ文獻學的には後者が前者の前提であるにしても、哲學的には前者こそ却つて後者の基礎である。このことは勿論イエーガーにあつても決して見逃されはしなかつた。彼の「形而上學成立史研究」から、アリストテレス―彼の發展史の基礎づけへの轉向は明かにこの自覺の表現とみらるべきである。⁽²⁾にも拘らず形而上學に於ける思想的連續性は彼の後の書に於ても充分論明されてゐない様に思はれる。彼の解釋に於ては謂はゞ形而上學の「批判的解體」(Abbau)の意味に於ける發展と「批判的改築」(Aufbau)の意味に於ける發展とが動搖してゐるのである。⁽³⁾そしてそのことは原始形而上學と後期形而上學との思想的關聯の缺如として彼に復讐した。即ち彼は形而上學に於て發生的時代層の異別を明示するために、原始形而上學の中に含まれた後期のそれへの發展の契機を犠牲に供したのである。そして我々のイエーガーの形而上學解釋に對する疑ひは恰かもこの點に向けられねばならない。ステンツェルはギリシヤの哲學

的思索に於ける連續性について「新しきものは凡て古くから準備せられた、たゞ以前に餘り明かでなかつたところのこの點又はかの點がより力強くなつたものに過ぎない、又思想の發展が既に追越してしまつた様な思想形象が執拗に新しいものと並んで主張される」と語つてゐる。^(五)このことはアリストテレスの形而上學的思想の發展についても等しく妥當せしめられねばならない。この思想の連續性を證示するため、我々は我々自身の形而上學解釋に這入つてゆかう。アリストテレス形而上學は、イェーガーによつて拒否し、難く示された様に、文獻學的成立史的に云つて決して體系的に統一された著作ではなくて、その中に初期的思想と後期的思想とを含んでゐる。しかしそれは哲學的問題史的に云ふならば、ぎぎなる基礎概念によつて貫かれてゐる。それ故にアリストテレスの形而上學は、初期的なるものと後期的なるものを通じて感性的實有から非感性的實有への發展を含む存在一般 (*ousia*) の學である。我々はこのテーゼを論證するために次の問ひを提示しなければならぬ。一、初期並びに後期形而上學の基礎概念としてのぎぎは如何なる意味をもつてゐるか。二、初期並びに後期形而上學の中に「感性的實有から超感性的實有への發展」が含まれてゐることを我々は如何なる意味に於て主張し得るか。

一、アリストテレスの形而上學は一般に「存在する限りの存在」(ὄντι ὄν)の學であると云はれる。しかしこの言葉は如何なる意味を擔ふべきであるか。我々はその中に尠くとも三つの意味を區別しなければならない。

ὄντι ὄν はまづ第一に中世の解釋に於て支配的な地位を贏ちえた様に、超感性的、超越的存在——ens immaterialis, ens transcendentalis——を意味する。そしてかゝる存在の究竟者としての神を對象とする限りに於て形而上學は「神學」(θεολογία)と呼ばれる。現代に於て人々はὄντι ὄνのこの中世的な意味に、多くの注意を拂はない様に見える。しかしこの意味は我々の解釋にとつて決定的である。そのことを證示するために我々はそれと殆んど同義語として用ひられたところの「第一なる存在」——πρώτος ὄν, τὸ πρῶτον, πρώτη οὐσία——といふ言葉を想起することは好ましいであらう。それは「實有篇」に於ては概ね第一範疇としての實有の意味に用ひられてゐるけれども「神學篇」に於ては同じ言葉が屢、不動なる實有の意味に用ひられ、亦他の場所ではプラトンのイデア的存在を示すためにすら用ひられてゐる。(5)そしてそのことと對應して、アリストテレスが「第一哲學」(πρώτη φιλοσοφία)と呼んだとき、それは實有一般の第一原理をではなく、却つて超感性的、超越的存在を探究する學の意味に用ひられてゐたこと

は明かである。⁽⁶⁾ 然し我々はεἰς εἰςのかゝる意味を上の言葉の單なる類比から假説しようとしてゐるのではない。その確實な證據を我々は形而上學の極めて初期的な部分に見出すことができる。卷K(七)に於ては、我々の索めてゐる學が「存在する限りの、そして乖離される限りの存在のある學」(τῆς ἐπιπέδου τοῦ ὄντος ἢ οὐ καὶ χωριστοῦ)として規定され、⁽⁷⁾そして我々がかつて卷E(一)に於ても見た様に、この學が自然學及び數學と區別されて *Deooryuch* として定義されてゐるのである。こゝに擧げられたεἰς εἰςを我々は如何に解すべきであるか。アリストテレスはこの言葉の下に存在一般の學と超越的存在の學との二つの學を理解しようとしてゐるのであるか。存在する限りの存在が超感性的存在と並んで、それらの學が索められてゐるのであるか。もしさうであるならば、直ぐそれに續いてその學が神學であり、最も望ましき學であるとして如何にして論じ得たであらうか。εἰς εἰςは茲ではなによりも超越的存在を意味し、この場所に用ひられた *καὶ* は同格を示すものとして、より嚴密には存在する限りの、即ち乖離的な限りの存在と譯せられねばならぬ。⁽⁸⁾ このことからしてひとはアリストテレスに於て、恰かも *ἡ πρῶτη οὐσία* がさうである様にεἰς εἰςも超越的存在の意味をもつてゐた所以を知ることができらであらう。

ὅτι οὐκ ἔστιν ἄλλο (9) は第二にそしてより一般的には、ナトルプその他の人々によつて力強く表明せられた様に、感性的實有一般を、就中範疇の形態による存在——他の凡ての範疇がそれによつて言はれるところの第一範疇——を意味する。(9) 存在は種々に語られるけれども、それらの中第一なる存在は事物の本質 (τὸ τί ἔστιν αὐτό) 即ち第一實有でなければならぬ。他の事物はその存在性の根拠を第一實有に擔ひ、それらが存在すると云はれるのはそれらが第一實有に與かる限りに於てである。なせなら諸の事物はたゞ實有のある規定性にしか過ぎないからである。「それ故に實有は第一なる存在でありそしてある特殊なる存在ではなくて端的なる存在でなければならぬ。」(ὄσπερ τὸ πρόωτος οὐ καὶ οὐ τί οὐ δὲ λανθῶν ἀπὸ λανθῶνς ἢ οὐστία αὐτοῦ ἐστίν.) (10) 形而上學の任務はかくてなによりもまづ最初にそしてたゞひたすらにこの種の存在の本質を探究することにあり。けれども「實有篇」に於て克明に證示された様に、存在の本質を再び自然的事物の中に索めることも、存在の超越性としてのイデアの中に措くことも不可能であるからして、それは必然的に存在の存在性事物の内在的形相 (ἐνυπόστατος εἶδος) に歸趨しなければならぬ。存在する限りの存在は超越的存在或ひは神的存在をよりも、むしろ感性的所與としての存在から出發して我々の經驗の近づき得るところの感性的世

界に共通なる存在一般を意味する。かゝる思想的關聯からして $\epsilon\iota\sigma\iota$ は感性的存在一般に等置されるのである。

$\epsilon\iota\sigma\iota$ はしかし最後にそして最も根源的には、およそ存在と呼ばれ得る限りの總ての存在を、從つて感性的實有と共に超感性的實有をも包含した言葉の最も廣き意味に於ける存在一般を意味する。この解釋を理由づけるものとして、アリストテレスに於て第一哲學と略同じ意味をもつてゐたところの智慧 (*sophia*) なる概念を想起することは望ましいであらう。なせならばこの言葉は一つにはある特殊なる技術の堪能を意味してゐたけれども、より本質的にはそれは部分的ではなく、一般的領域に於ける知識の形態でなければならなかつた、⁽¹¹⁾そして同じことが $\epsilon\iota\sigma\iota$ についても妥當するであらうからである。亦我々がさきに引用した卷K(七)の最後に於ては、存在する限りの存在の學は一般的であるかどうかと問はれ、卷Eのこれに對應する場所に於てと同じ様に、こゝでもこの學は自然學よりもより先なるものであり、より先なるが故に亦一般的でもあると答へられてゐる。そしてこの答へが、より先なるものに含まれた時空的及び概念的意味の混淆にしか過ぎないことを我々は既に示しておいた。⁽¹²⁾しかしこの言葉の多義性を充分自覺してゐたところのアリストテレス

が何故にかゝる混淆を許し得たのであるか。それはなによりも $\epsilon\iota\sigma\iota\varsigma$ がもつところのこの第三の根柢的な意味によつてあると答へられなくてはならない。そしてこの基礎の上に立つて甫めてより先なるものとしての第一哲學は、存在一般の學としての形而上學に轉化し得るのである。なせならば $\epsilon\iota\sigma\iota\varsigma$ はその中にこの二つの契機を含み得るからである。まことにこの言葉は超越的存在及び感性的存在一般の根柢にあつてこれら凡ての存在を含むところの、言葉の最も廣い意味に於ける「存在する限りの存在」であつた。そして「哲學者の學は存在する限りの存在一般の學であつて部分的存在ではな⁽¹⁸⁾」 ($\eta\ \tau\omicron\upsilon\ \varphi\iota\lambda\omicron\sigma\omicron\varphi\omicron\upsilon\ \epsilon\pi\iota\sigma\tau\eta\mu\eta\ \tau\omicron\upsilon\ \delta\upsilon\tau\omicron\varsigma\ \eta\ \delta\epsilon\ \kappa\alpha\theta\acute{\omicron}\nu\ \kappa\alpha\iota\ \omicron\upsilon\ \kappa\alpha\tau\acute{\alpha}\ \lambda\acute{\omicron}\sigma\omicron\varsigma$) と言はれたのも上の意味に理解されなければならぬ。このことからしてプラトン主義に堅く結ばれたところの初期形而上學に於てさへ $\epsilon\iota\sigma\iota\varsigma$ の根源的なる意味を汲みとる所以をひとは理解するであらう。従つて我々はアリストテレスがプラトンの思想圈を彷徨してゐた時代に於ても、既に彼の天才的直觀によつて超感性的及び感性的實有一般を含むところの存在の一般學に、たゞそれが可能的にであるにもせよ、想到してゐたと考へなくてはならない。この想定によつてのみ原始的形而上學から後期形而上學への推移が可能なのである。ひとはこのことを解釋の

便宜のために我々の假説したアナクロニズムにしか過ぎないと非難するであらうか。もしさうであるならばしかし、彼のイデア批評さへその據つて立つ地盤を失ふではないか。なせならばそれは周く知られてゐる様に、決して内在的立場を嚴守してゐないで、屢々存在する限りの存在の上の様な意味を豫定してゐるからである。

たゞ我々は形而上學の對象としてのぎゞぎなる概念が初期形而上學と後期形而上學とに於てもつところの著しい重點の差を見逃してはならない。前者に於てはプラトンの思想の餘蘊を受けて超越的存在の契機が繁生し、従つてかの概念の嚮に掲げた第一の意味が、しかるに後者に於ては初期時代にたゞ可能的に萌え出たに過ぎなかつたところの感性的實有の契機が現實的なる世界に於て萬花を開き、従つてかの概念の第二の意味が形而上學の象面に浮び出るのである。このぎゞぎそのもののもつ二つの契機の可能態から現實態への推移によつて、アリストテレスのかの超越論的存在學から存在論的存在學への轉身も甫めて可能であつたと想定することは最もアリストテレス的であるであらう。それ故に神學と存在學とのアポリアも、それがアポリアとして把握される限り、原始形而上學と後期形而上學とを區別することによつて解消するのではなくて、むしろぎゞぎなる概念そのものの中に

胚胎した本質的な性格であると云はれなければならぬ。我々は以上に於て**επι**がもつところの三つの意味及び形而上學がこの概念の發展と考へらるべき可能を示した。しかしこの主張は現實に形而上學の各篇について論證されねばならぬ。この目的のために我々は更に第二の問ひに進んでゆかう。

二、形而上學は主題の問題を中心として、極めて興味ある三つの部分に分つことができる。その一は全體的に超越論的、プラトンの色彩に掩はれ、かのアポリアがたゞ萌芽的な姿でのみ看取されるところの卷A, K, Λ, その二は神學と存在學とが共に形而上學の前景にもち來されこの二つの主題の動搖が明かにアポリアとして把握されてゐるところの卷B, Γ, E, 及び最後に形而上學が存在の一般學として超越的存在はたゞ否定的に語られ、かのアポリアの卓れた解決の仕方が示されてゐるところの卷Z, H, Θ, Mである。

我々は形而上學の最も初期的なモデルとみられるところの卷Λから始めよう。普通「神學篇」(Theologia)の名を以て呼ばれてゐるところのこの書は、その開卷に於て云はれてゐる様に、超越的存在のみでなく感性的存在をも含む實有一般の原理と原因とをその研究對象としてゐる。(περί τῆς οὐσίας ἢ θεολογία)そして全體は感性的實有論

(第一—五章)と超感性的實有論(第六—十章)との二部に區別される。即ち第一部に於ては感性的實有の本質的性格をなすところの變化 (*metabole*) の分析からして三つの概念——*eidōs*, *ortēphōsis*, *ēnē*——が及び實有の三つの種類——*ēnē*, *phōsis*, *kalō* *ēnōsta*——が提起され、それに實有の他の様相——*ēlēphēta*, *ōnōphōsis*——が續き、第二部に於てはこの變化、運動の究極的原因としてかの第一運動者 (*τὸ πρῶτον κινῶν*) が指定されてゐるのである。それはかうである、運動や時間は生成し消滅することはできない、そして運動するものは現實的である、といふのは現實とならなければ運動ではないであらうからである。更にまた絶えざる運動に於て動かされてゐるところのものがある。しかし動かすものも動かされるものも共に中間的なものであるからして、その究極に久遠の實有であり純粹なるエネルギーであるとところの「動かされずして動かすもの」 (*τὸ πρῶτον κινῶν ἀκίνητον*) が必然的に存在しなければならない。そして必然的に存在する限りに於てそれは善である。これこそ凡ゆる存在の第一原理であり、神である。かくて、第一部は卷 Z, H, Θ に對應し、後期形而上學の構成に合致してゐる様に見える。しかし我々は兩者の重要な異別を見逃してはならない。第一部に於ける感性的實有論は第二部に於ける超越的實有論の出發點とその基礎とを提供し、

感性的事物の運動からその第一原理としての第一運動者、形相の形相、神が繹出され
 てゐる、しかし茲では感性的實有論は自然學に歸屬し、超越的感性論のみが形而上學
 の獨自の領域として明示され、プラトンのイデアの意味に於ける最も高次の、又最も
 善き存在が索められてゐるのである。(Timæus 87a-b) *ἡμεῖς δὲ θεῶν οὐρανίου, οὐκ ἐπιπέσομεν αὐτῶν καὶ ἡ
 ἀκίνητος* (14) ⁽¹⁴⁾ それ故に卷Λにあつては形而上學は神學であつて決して感性的實有をも
 含む實有一般の學ではない、従つてこゝでは神學と存在學とのかのアポリアは未だ
 存在しないのである。更に又この場所に用ひられた文體を思想の外的證據となし
 得るならば我々は次のことを書き加へておいてもよいであらう。既にポーニツツ
 によつて指摘された様に、第一部の記述はもつぱら素描的に撮要的になされ、無味乾
 燥を極めてゐる。之に反して第二部はそこに論せられた對象に相應しく高揚した
 氣品ある章句によつて充され、それは最後の *“ οὐκ ἀγαθὸν τοῦ ἀκούσαντι, εἰς κοίτην ἔσται ”*
 に至つて最高潮に達してゐる。⁽¹⁵⁾ ⁽¹⁵⁾ アリストテレスはこゝで謂は、自然學の曠野に立
 つて、永遠なるものへの頌歌を歌ひ上げてゐるのである。彼のこの第二部への關心
 からして我々は卷Λをアリストテレスが全然プラトンの影響の下に立つてゐた最
 も初期的な部分と云つてもよいであらう。⁽¹⁶⁾ ⁽¹⁶⁾

卷 K が卷 B, Γ, E に對應するところの講義の稿案として初期形而上學時代に成立し、そしてその全體を支配してゐるものが純粹にプラトンの思惟形象であることは既に屢、關説された。⁽¹⁷⁾ 茲では形而上學的諸問題はその對象について次の様に叙せられてゐる。索められてゐる學は自然學で論せられた諸原因を對象とするのではない。ではその對象は何であるか、感性的實有であるか、他のものであるか。個別的なもの以外のものが措定さるべきであるか、それとも個別的なものが對象であるか。しかし後者はその數に於て無限であり、前者は類と種とである。索められてゐる學はこれらの孰れをも對象としてゐるのではない。では一般に感性的實有即ち此岸的存在以外に超越的實有が存在すると假定すべきであるか、亦はさうでなくて前者こそ存在するものであり智慧はそれらを對象としてゐるのであるか。なせならば我々はある他の實有を探究してゐる様に思はれるからである。かくて我々の課題はかうである、超越的存在、自體を、そして感性的なるものに、毫も歸屬することなき存在を觀察すること。*(τὸ ἰδεῖν εἴ τι χωριστῶν καθ' αὐτὸ κἀν ἑαυτῶν τῶν ἀσθενῶν ὑπάρχον)* 事實最も卓抜なる人々によつてこの様な原理と實有とは存在するものとして索められてゐる様である。なせならばもし永遠なる、超越的なるそして持続的なるある

存在 (τὸ οὐ τιθῆναι κ. χωριστῶς κ. μόνον) が存しないならば如何にして秩序があるであらうか。⁽¹⁸⁾ 索められてゐる學はなにもまして超越的存在の學である、そのことからして我々は卷 K (第一—八章) を卷 A と略、同時代のものと假定してよいであらう。しかるにこゝで既に εἰς εἰς なる言葉が見出され、哲學は存在を運動する限りに於てでもなく亦附帶的屬性をもつ限りに於てでもなくて、存在をそれ自體に、それが存在する限りに於て探究しなければならぬ、と言はれ、亦後にそれが靜止した乖離的なるそしてそれ故に又神的なる存在の學であり最も優れた原理である、と述べられたことは嚮に注意しておいた通りである。⁽¹⁹⁾ このことは形而上學の中に初期的思想と後期的思想とを峻別しようとしたイェーガーを困惑させるに十分であつた。それ故に彼は「卷 K (第一—八章) も亦形而上學の原の形ではない」と云つてゐる。⁽²⁰⁾ では卷 K は形而上學成立史の如何なる部分に屬すべきであらうか。我々の假説に従へば卷 K はまさしく「形而上學の原の形」なのである。そしてこゝに εἰς εἰς の規定が見出されることは何らの困難をも齎さない、といふのはこの言葉は、既に述べた様に種々の意味をもち、こゝでは著しく超越論的色彩を帯び、存在する限りに於ける存在の基礎的な意味は背後に退いてゐるからである。たゞしかしこの言葉によつてアポリアの萌芽

が胚胎してゐることは注意されなくてはならない。

卷 A に於て索められてゐるものは、同じく神的なるものの學である⁽²²⁾。そして卷 K は「智慧が第一原理の學である」⁽²³⁾ (*ἡ σοφία περὶ ἀρχῆς ἐπιστήμης τῆς ἐστῆς*) といふ卷 A の引用によつて首められ、亦第一哲學の代用語としての *σοφία* なる特殊の言葉が主として卷 A 及び卷 K に見出されることからして、この書を卷 K と同じ成立期に屬するものと推定することは許されるであらう。卷 A に於てはその全體的プラトン主義にも拘らず、既に指摘された様に、⁽²⁴⁾ 神的なる學が同時に凡てを知るところの一般的知識として示されてゐる。この一般的 (*καθόλου*) なる言葉はその文脈から明かである様に、根源的なる意味に於ける *ἐπιπέδιον* ではなくて、最も認識し難きもの、感覺から最も遠きもの、従つて *θεῖον* と呼ばれるに相應しいものである。しかしこれを初期形而上學に於けるアポリアの萌芽として妥當せしめ得るには足るであらう。十九世紀の初葉に於てブランドイスその他の人々によつて、卷 A, K, Λ が他の諸卷と區別されて形而上學の初期の梗概と見做されたのはそれ故に決して偶然ではないのである⁽²⁵⁾。

以上によつて卷 A, K, Λ が超越的存在をのみ形而上學の主題とし、かのアポリアは後期形而上學への發展の可能的契機としてのみ見出し得るに過ぎないことが、明か

にされたものとしよう。これらの諸卷に於てアリストテレスはかのアポリアを殆んど自覺してゐない。之に反して卷Kの修正補足によつて成立し、あたかも原始形而上學(卷A, K, Λ)と後期形而上學(卷Z—M)との過渡を示すところの卷B, Γ , Eに於ては、アポリアは問題の象面に齎され、アリストテレスはそれの克服に銳意を用ひた様に見える。このことを理解するために我々はまづこれら諸卷が卷Kに對してもつ重要な差異を、我々の問題に直接關與する限りに於て、指摘してみよう。

形而上學の課題について卷Bでは略、次の様に誌されてゐる。凡ゆる形而上學的諸問題の中最も困難でありしかも必然的なものはかうである。個別的なもの以外のあるものは存在せず、亦個別的なものは無限であるとするとするならば、無限なるもの知識はそもく如何にして捕捉し得られるであらうか。なせなら我々が凡てのものを認識するのは、それらが一なるそして等しきあるものである限りに於て、更に又一般的なるなにか、それらに屬する限りに於てだからである。しかしこのことが必然的でありそして個別的なるもの以外になにか、存在しなければならぬとすれば、それは類であることが必然的であるかも知れない、しかしそれは不可能である。更に具體的なもの——あるものが質料に就て述語されるときに私は具體的なもの

と云ふ——以外にあるものがなにもにままして存在するとするならば、あるものは、もしそれが存在するならば、凡てのもの以外に或ひは若干のもの以外に存在せねばならぬか、又は若干のもの以外には、或ひは如何なるもの外にも存在しないかと問はねばならない。⁽²⁶⁾ これらの言葉を嚮に擧げた卷Kのこれに對應する場所と比較するならば、ひとはこゝに陳べられたアポリアがかしこのプラトンの思惟形象を著しく拂拭し感性的存在を超越して、ある世界のみをではなく、それと並存するところの非感性的存在を問題としてゐることを容易に見出すであらう。同様なる反プラトンの諧調を我々は他の多くの場所でも聴きとることができ⁽²⁸⁾。のみならず卷Kに全然存在しないところのアポリアが茲で加へられてゐるのである。それは十五のアポリアの中最後の二つのもの、即ち原理の可能性と一般性、個別性と一般性に關してゐる。そしてイエーガーは前に述べた様に、これらの間ひが卷Z—Θに對應するところからして、初期形而上學に後期の形態が加へられた際補入されたものと解してゐる。⁽²⁹⁾ しかしこれは多くの蓋然性をもたぬ様に思はれる。なせならば卷Γに於ては實有があるだけ哲學の部分もそれだけある、従つてある第一のものとしてそれに従ふところのものがなければならぬ⁽³⁰⁾と云はれ、卷Λに於て自然學にその場所を譲つ

たところの感性的實有が茲では哲學の領域に移植せられてゐるのだからである。更に又他の場所では、矛盾律を否定する人たちへの論駁がなされた後に存在の二つの意味——即ち運動も滅失も生成も全然それに屬しないとある實有と、可能的に又は現實的に存在するもの——とが述べられてゐる。そして卷 K のこれに對應する箇所では、このことについて自然學への指示をもつのみである。⁽³¹⁾ これらのことからして卷 B で他のアポリアと並んで感性的實有に屬する可能性と現實性が問題とされたことは極めて自然のことと云はねばならない。こゝにも亦後期形而上學への歩みを發見することができるのである。

卷 E (二) に卷 K (七) が對應する。茲で我々の注意を惹くのは卷 B、Γ がそれ、卷 K のそれに對應する章句に多くの筆を加へて成立してゐるに反して、この場所のみはかの場所の章句が殆んど本質的な改更を受けることなしにその儘踏襲されてゐることである。このことはアリストテレスが第一哲學を神學として規定することに最早多くの興味を感じなかつたことを示してゐるといふべきであらう。そして補正された部分はあたかも $\epsilon\iota\sigma\epsilon\iota\varsigma$ の規定に關してゐる。即ちかしこで超超的存在に近い意味を擔つてゐたところのこの言葉は、こゝでは他のひとつの契機であるとこ

ろの根源的なる意味に於ける存在一般に發展し、その結果としてかのアポリアは救ひなき *crux metaphysica* として現實の層に顯はにされたのである。我々はこの章の成立の心理的過程を次の様に解し能はぬであらうか。アリストテレスは卷 K(七)に於ける「最も榮ある神的存在の學」としての形而上學の規定を、この場所に拒否すべく尙あまりに多くの愛惜を感じた。それ故に卷 K(七)の圖式をその儘用ひ、自然學は獨立した、しかし不動ならざるものを、數學のあるものは不動なる、しかし獨立せずして恐らく質料の中にあるものを、しかるに第一哲學は獨立した、しかも不動なるものを取扱ふ」と規定した。しかし彼は明かに第一哲學のかゝる定義に満足することはできなかつた。彼にとつてそれは既に卷 I に於て周匝に論せられた様に存在する限りの存在の一般學でなければならなかつた。この矛盾を意識した彼は稍唐突にこの章の終りに於てその矛盾の回避を試み、——このことはイエーガーをしてこの最後の章句が後に加へられたことを假定せしめた——「より先なるが故に亦一般的でもある」と論ずることによつて *εἰς* に含まれた超越的存在からその根柢にあるところの存在する限りの存在に達し、かくて第一哲學の新しき展望を開いたのである。そしてこの思想の動搖と混亂とはこの章に用ひられた種々の概念、たとへば

καρπύριον の意味の混淆によつても之を證示することができると想定することは餘りに spitzfindig に過ぐるであらうか⁽³²⁾

卷 E(二—四)は存在の四つの形態の枚擧によつて首められ、前篇と殆んど思想的連絡を保つてゐない、更に之に續く卷 Z の冒頭に於ける同じ存在形態の枚擧は卷 E(二)をではなく卷 Δ(七)を引證し直接先行諸卷に續くものではない、このことからしてイエーガーが卷(二—四)を「初期の序篇」卷 A—E(二)と後期の主要部分(卷 Z—M)との結合篇であり、アリストテレスが主要部分に誘導しつゝ、後の構造を素描したところの、最後に附加された部分」と解したことは、既に述べた通りである⁽³³⁾。然し我々はこの假定に對しても種々の反證を擧げることができ、ポニーツツ、イエーガーによつて克明に舉證された様に、卷 Z—Θ が獨立した講案として存在したものであることを許すならば——そのことは殆んど疑を容れる餘地がない——その時未だ形而上學の一部ではなく獨立したメトドスとして一般に流布した「語彙篇」卷 Δ が引用されたことは極めて自然であり、卷 Z の成立の際未だ卷 E(二)が書かれてゐなかつたことの證據とはなり得ないであらう。更に卷 E(二—四)に卷 K が對應してゐることは明かである。即ちそこでは存在の偶然的形態が論究せられ、更に眞的存在形態が關説され

てゐるのである。このことからして我々は問はねばならない、もし卷E(二―四)が後の修正によつて填補されたものであるとするならば初期時代に成立したと云はれるところの卷K(八)の最後に、それに對應する部分が如何にして存在し得たであらうか。この困難はイエーガーによつても意識されてゐる様である。⁽³⁴⁾最後に卷Θ(一〇)の最初には存在の種々なる意味として、他の場所で挙げられた四つの形態の中偶然的存在を除いた他の三つの形態が挙げられてゐる。そしてこのことは存在の偶然的形態が卷E(二―三)で既に周匝に論究され形而上學の領域から追放されたことを前提してゐるものと云はなければならぬ。そして卷Θ(一〇)は卷E(四)に於て後の叙述を約束されたところの形而上學的眞理概念に關してゐるのである。以上の理由からして我々は卷E(二―四)が第一章と同時に成立したものであることを論決してもよいであらう。唯卷K(八)に於ては未だ存在の四つの意味が挙げられてゐない、従つて卷Kの成立の時期に於ては存在の種々なる意味の學としての形而上學は未だ見出されなかつた、然るに卷E(二―四)に於ては第一章に於て自覺されたTheologia-Ontologia-aporiaを打破するために、新なる形而上學的體系が企圖され、このとき既に卷Z―Mの後期形而上學の論構が想到されてゐたものと云はねばならない。そして

恰かもこの故に卷 E(二—四)は我々の意味に於て後期形而上學への「結合篇」となり得るのである。

思想史的には卷 E(第二章)を以て、成立史的には卷 Zを以て最もアリストテレスの形而上學の體系的構成は始まる。こゝに問はれてゐるものは曾て問はれ、今もなほそして久遠に問はるべき「存在とは何であるか」(τὶ τὸ ὄν ἐστίν;)の問ひである。そして形而上學はこの問ひに相應しく、すぐれて「存在の種々なる意味の學」となつた。かつて自然學の課題として流謫された感性的實有がこゝでは第一哲學の王國の中に迎へられ、そしてこの實有はかつて超越的存在によつて占められた形而上學の王座を僭奪した様にさへ見える。しかしこの時代に於ても形而上學的秩序の變革が行はれたのではない。アリストテレスの若き日の理想 “οὐκ ἀπαθὴν τὸν κερμαίνον, ἐστὶ κοίτην ἕρπυα” は決して地上的なる存在に屈したのではなかつた。彼の天才が既に卷 Aに於て示した様に、茲でも感性的實有から超感性的實有への上昇の過程は堅く守られてゐるからである。彼は卷 Z(三)のある場所で云つてゐる。「感性的なるもののあるものは實有である」と同意されてゐる、従つてこれらのものをまづ最初に論じなくてはならない。なぜならばよりよく知られるものへ進むことが有効であるから。

といふのは學習はこの様に凡てのものに對してその本性上より尠く知られたものを通してより衆く知られたものへの道に於て生じるからである⁽⁵⁵⁾。このアリストテレス的な認識の仕方を示した著名な言葉はポニーツツによつてその場所の謬れることが發見されてゐる⁽⁵⁶⁾。しかしこの言葉そのものの現在すると否とに拘らず、我々はこの方法的なものが、初期形而上學に屬する卷Aに於てもさうであつた様に、體系的時代の形而上學をも貫ぬいてゐることを揚擧しなければならぬ。この時代に於て彼の關心の中心をなしたものは感性的實有一般の研究であつたけれども、それは尙ある意味に於て超感性的なるものへの準備にしか過ぎなかつた。我々が同じ場所から次の言葉を引用するならば、ひとはそのことを最早疑ひはしないであらう。「かゝる實有の質料以外に他のある質料があるか否か、そして我々がある他の實有たとへば數若しくはその種のあるものを探究せねばならぬか否かは後に考察しなければならぬ。なせなら感性的實有について規定しようと試みてゐるのもこのためであるから。蓋し感性的實有についての觀想はある意味で自然學の、即ち第二哲學の仕事であるからである⁽⁵⁷⁾。然し茲で「後に」と云はれたものは明かに卷Aをではなく、卷Mに於けるアイデア及び數學的對象の批判を意味してゐる。アリストテレ

スは彼の體系的時代に、超感性的實有について、この消極的究明の外に彼自身の理説を貽してゐない。それ故に彼が初期の論稿卷△第二部に於ける「自然神學」に満足して——現在に於ける卷△の位置によつて形而上學の編纂者がそれを示さうとした様に——體系的形而上學の冠冕をなすべき積極的超感性的實有論を卷△によつて代用せしめようと欲したか、或ひは新なる「神學篇」をもしたにも拘らず不幸にしてそれが喪失したものであるか、孰れとも我々は決することができない。しかし尠くともこの時代の形而上學が、卷△に表現された初期形而上學の概念に於ての様に、感性的實有一般から超感性的實有への發展を含む存在一般の研究であつたことには疑ひを容れ得ないであらう。

自然學の序章に於ても敍べられてゐる様に、アリストテレスの哲學的思索を通じてつねに彼を導いたところの探究の道は「我々によりよく知られそしてより明かなものから、その本性上より明かなよりよく知られるものへ進む」ことであつた。⁽³⁸⁾ そしてかれの存在の研究に於てこの方法を嚴守せしめた所以のものは、 $\alpha\beta\gamma$ のもつ二つの契機とその根柢にあるところの根源的なる存在一般の領域によつてに外ならなかつた。形而上學が $\alpha\beta\gamma$ の研究であると云はれるとき、それはなによりもこの

概念の基礎的形態の可能から現實への發展とみられなくてはならぬ。イエーガーによつてなされた原始形而上學と後期形而上學との區別はこの發展段階の兩端に立つ二つの道標を示すものと解釋される限りに於て勿論正しい。しかしその孰れに於ても、我々がかつて神學篇及び實有篇に於て見た様に、重點の差こそあれ、感性的實有から超感性的實有への發展を含む存在としての存在の學であつて、一は神的存在のみを、他は感性的實有のみをその主題としてゐるのではない。我々が $\xi\eta\zeta$ の基礎的意味を正しく把握するとき、神學と存在學とはその中に發展史的に定位づけられ、かのアポリアは最早アポリアであることを止めるであらう。このときひとはなほも「形而上學の主題は神學であるか存在學であるか」と問ふであらうか。そして「その二つの學は同一である」と答へるであらうか。形而上學はその孰れでもあり、孰れでもないのである。そしてそれが如何なる意味に於てであるかを我々は上に明かにした。

アリストテレスは多くの人々によつて語り傳へられてゐる様に、プラトンを先天の夢に耽る幸福なるイデア思想家として嘲笑し排撃することによつてではなく、プラトンの世界的世界の中に沈滞し、プラトンの問題を問題とすることによつて彼の學的生

涯を出發し、そして彼の獨自性にも拘らず彼の生涯を通じてプラトン主義はつねに彼の思索を支配してゐたのである。まことにかれこそは現實の世界をプラトンの眼を以て見た最初のギリシヤ人であつた。

(一) Arist. S. 227.

(二) 上記第一節註二六參照。「成立史研究」に於ても折にふれて、形而上學の各メトドスが獨立してそれぞれ統一を保ち、思想的にのみ關聯をもつてゐるを述べ (Entstehungsgesch. S. 155 etc.) 又形而上學の最後の時期に於ける修正が統一の傾向を示してゐることを注意してゐる。(Arist. Kap. 4.) しかしそれは彼の形而上學解釋に對して主要なる役割を演じてゐる。

(三) G. Silligen; Zum aristotelischen Metaphysikbegriff. 1930. S. 37.

(四) J. Stenzel; Metaphysik des Altertums. 1931. S. 46 f.

(五) Phys. B 7. 198b 3. Bonitz; Ind. Arist. 653b 7—13.

(六) Metaph. E 1, 1026a 16. De interpr. 13, 23 a 24. De an. A1, 403b 16, Phys. B2, 194b 14—15. De Caelo 8, 277b 10.

(七) Metaph. K7, 1064a 28—30. 參照。

(八) Metaph. K2, 1060a 8—9. 同じである。E1, 1026 a 6 に於て $\epsilon\iota\varsigma$ $\alpha\iota\tau\iota\omega\delta\epsilon\iota\varsigma$ の特殊なる用法は避けられてゐる。K 7, 1064b7 に於ける $\tau\omicron$ の註葉 E 1, 1036a 24 $\tau\omicron$ $\mu\epsilon\tau\alpha\tau\eta\ \phi\alpha\lambda\sigma\sigma\eta\sigma\iota\alpha$ によらされてゐる。

(九) P. Natorp; op. cit. Werner: Aristote et l'idealisme platonicien. 1909. Introd. 參照。

(一〇) Metaph. Z1, 1028a 30—31. b6—7. θ 1, 1045 b 27. ζ 1, 1028a 32, 4, 1030b 5, a29—30. 5, 1031a 13, 7, 1032b 2, 11, 1037 b3, 1 3, 1054b 1 參照。

(一一) Edh. Nic. Z 7, 1141a 9—15, 8, 1142a 14—15, Metaph. A2, 982 a 8—19. Inthe; Begriff und Aufgabe der Metaphysik

プリモトテレンメ形而上學の主題とその構成

- (*scopia*) des Aristotel. s. 1884 參照。
- (一二) 本誌、第二百三號、六七頁以下參照。
- (一三) Metaph. K3, 1060b 31—32. Γ 1, 2. 參照。
- (一四) Metaph. Δ6, int. Z 11, 1037a 14. Γ2, 1004a 3—4 と比較せよ。卷ハと自然學との關聯に關して Bonitz; Comm. p. 25. Natorp; op. cit. S. 541 Anm. 48, 49 參照。
- (一五) Bonitz; Comm. p. 23 sq. Jaeger; Arist. S. 228ff. イテーカーは卷Δが最も初期の著作である、と云つて卷Γと犀利な比較を試みてゐる。Arist. S. 232.
- (一六) 第一運動者としての思想的發展に關して Arist. S. 144. 參照。
- (一七) 本誌、第二百三號、六六頁參照。
- (一八) Metaph. K. 1—2.
- (一九) 上記、註七參照。
- (二〇) Arist. S. 222. „Auch ältere Fassung der Einleitung(K1—8) noch nicht die ursprüngliche Form der Metaphysik ist.“
- (二一) 本文七十七頁參照。
- (二二) Metaph. Δ2, 982b 28—a11, K2, 1060a 26. と比較せよ。
- (二三) Metaph. Δ2, 982b 28—a11. Γ2, 1060a 26 と比較せよ。
- (二四) Metaph. A 1, 2, 996b 9. K1, 1059a 18—34. Bonitz; Ind. Arist. 688b 55—60. 參照。
- (二五) 本誌、二百三號、八六頁參照。
- (二六) Brandis: Denkschrift der Berliner Akademie 1834. Trize: De aristotelis operum serie et distinctione. 1827. 尚 Jaeger; Einleitungsgesch. Einleitung 參照。
- (二七) Metaph. B4, 999 a24—b1.

- (二七) 本文八六頁以下参照。
- (二八) Metaph. B2, 997a 34—35 ㄱ K1, 1059 a38—b1 とのアキリアを比較せよ。
- (二九) Arist. S. 222. 参照。
- (三〇) Metaph. I2, 1004 a3—4.
- (三一) Metaph. I5, 1009 a 32—38, K6, 1062 b22—24.
- (三二) 本誌第二百三號六九頁註三^ニ参照。尙概念の混淆についてはホーニツ、シュネーグラ、ロス^ニの章に對する註釋をみよ。
- (三三) 本文六五頁以下参照。
- (三四) Arist. S. 222ff.
- (三五) Metaph. Z3, 1029 a33—b5; ノのアリストテレス的方法については Watz; *Arts. otolis Organon* II, 306 sqq. 参照。
- (三六) Bonitz; *Comm.* p. 302 sqq.
- (三七) Metaph. Z11, 1037a 10—16. イエーガーはこの場所もアリストテレスの體系的意圖によつて後に追補された部分と解してゐる。Arist. S. 206 Ann. 1.
- (三八) *Phys.* A1, 184a 17—18, *Eth. Nic.* A4, 1095 b2—4. 参照。

追記

この貧しき試作に於て私が論じえやうとしたことは、アリストテレス形而上學の主題がその成立史的構成を顧ることなしには決して理解され得ない、といふことであつた。しかしこのことは形而上學に於ける種々の概念についてもひとし

く妥當せしめられねばならぬ。たとへばかの「矛盾に充ちた」*ou as in Apele*の概念も、形而上學に於けるその思想發展の迹をたどることによつてのみ矛盾なき、いな、極めて整合的な貌を把握することができるのである。このことを私は「アリストテレスに於ける眞理概念の發展」なる論文(未發表)に於て精細に基礎づけやうと試みた。従つて形而上學解釋についての上の論據の強化と具象性とはさらにこの眞理概念の發展史的研究の中に期待されなくてはならぬ、といふことを私は茲に敢て誌しておきたいと思ふ。